INTELLECTUAL PROPERTY × GENERATIVE AI STRATEGY REPORT（2026 年 11 月版）

知財業務における最新世代 LLM（上位・中位 6 モデル）の戦略的使い分けガイドライン

対象モデル：Claude Fable 5.2 / GPT-6.2 Astra / Gemini 4 Carbon（上位モデル群）
Claude Opus 5.5 / GPT-6.2 Sol / Gemini 4 Neon（中位モデル群）

作成日：2026 年 11 月 19 日 ｜ 対象：企業知財部門・特許事務所・研究開発知財リエゾン ｜ 参照形式：文中番号引用方式

Gemini 4 Carbon

■ エグゼクティブ・サマリー（本報告書の要旨）

2026 年秋から 11 月にかけて Anthropic・OpenAI・Google の 3 社から出揃った最新世代モデル群は、いずれも 100 万トークン級の長大コンテキストを標準装備しつつ、**「中位モデルが前世代の最上位クラスに匹敵する実務遂行力を持ち、上位モデルは極限の多段推論・長期自律調査に特化する」**という明確な 2 層構造を形成している [1–4]。

知財業務は、数百〜数千件に及ぶ先行技術公報の一次スクリーニングのような**「大量定型処理」**から、わずか 1 語のクレーム解釈や進歩性の論理構築が権利の有効性・侵害成否を左右する**「超高難度・高リスク推論」**まで業務負荷の振幅が極めて大きい [5, 6]。そのため、単一モデルへの依存ではなく、**①業務工程（バリューチェーン）、②2 段階エスカレーション、③技術分野とセーフガード仕様、④異種モデル合議によるリスク監査、⑤課金構造の閾値**の 5 つの設計軸を組み合わせたハイブリッド運用が最適解となる。

第 1 章　最新 6 モデルの立ち位置と知財実務特性の俯瞰（2026 年 11 月時点）

2026 年 11 月現在、主要 3 ベンダーのフラッグシップ製品群は「上位（Frontier / Reasoning Tier）」と「中位（Workhorse / Production Tier）」に明確に機能分化している [7–9]。知財部門や特許事務所において実務ルールを策定するにあたっては、単なるベンチマーク順位ではなく、コンテキスト上限・出力トークン枠・キャッシュや Batch 処理の割引体系・安全装置（セーフガード）の挙動を含めた総合的な仕様理解が不可欠である。表 1 に 6 モデルの主要仕様と知財実務上の特性を整理する。

区分	モデル名	API 標準単価 (1M トークン 入/出)	コンテキスト / 最大出力上限	知財実務における主な強み・運用上の留意点
上位	**Claude Fable 5.2**	$8 / $40 [7]	100 万 / 12.8 万 [1]	緻密な法的・技術的論理構築、長時間の自律調査、図表読解の改善。**※バイオ領域（Opus 5 へ切替）・サイバー領域（Opus 4.8 へ切替）でセーフガードによる自動フォールバックあり** [1]。
上位	**GPT-6.2 Astra**	$8 / $40（※27.2 万超で割増） [8]	105 万 / 12.8 万 [2]	高度な科学・数理推論、複数工程の調査計画、指定様式に沿った完成度の高い文書・表計算・スライドの一発生成 [2]。長大入力時の割増単価に注意 [8]。
上位	**Gemini 4 Carbon**	$4 / $20（※11/30 迄 $2/$10） [9]	約 100 万（統合）/ 3.2 万 [3, 9]	思考トークンを大量投入した徹底的な探索・検証、複雑な特許図面・回路図・動画等を含む高度なマルチモーダル推論 [3]。思考トークンは出力単価課金 [9]。
中位	**Claude Opus 5.5**	$4 / $20（キャッシュ読取 $0.20） [7]	100 万 / 12.8 万（Batch 最大 30 万） [4]	結論ファーストで検証しやすい明快な文章力 [4]。長大な明細書・意見書のドラフティング、反復壁打ちにおける高いキャッシュ効率（Batch API は 50%割引） [4, 7]。
中位	**GPT-6.2 Sol**	$2 / $10（キャッシュ読取 $0.10） [8]	105 万 / 12.8 万 [2]	6 モデル中最安の標準単価でありながら高い実務遂行力 [2, 8]。日常の発明提案書整理、定型フォーマット処理、27.2 万トークン以下の高速スクリーニングに最適 [8]。
中位	**Gemini 4 Neon**	$3 / $15（Batch/Flex は半額） [9]	約 100 万（統合・Long Decode 対応） [3]	100 万トークン全域で単価一律 [9]。大量の PDF 公報×スプレッドシートの横断分析、長文一括翻訳、4 段階（low〜xhigh）の思考量制御に対応 [3]。

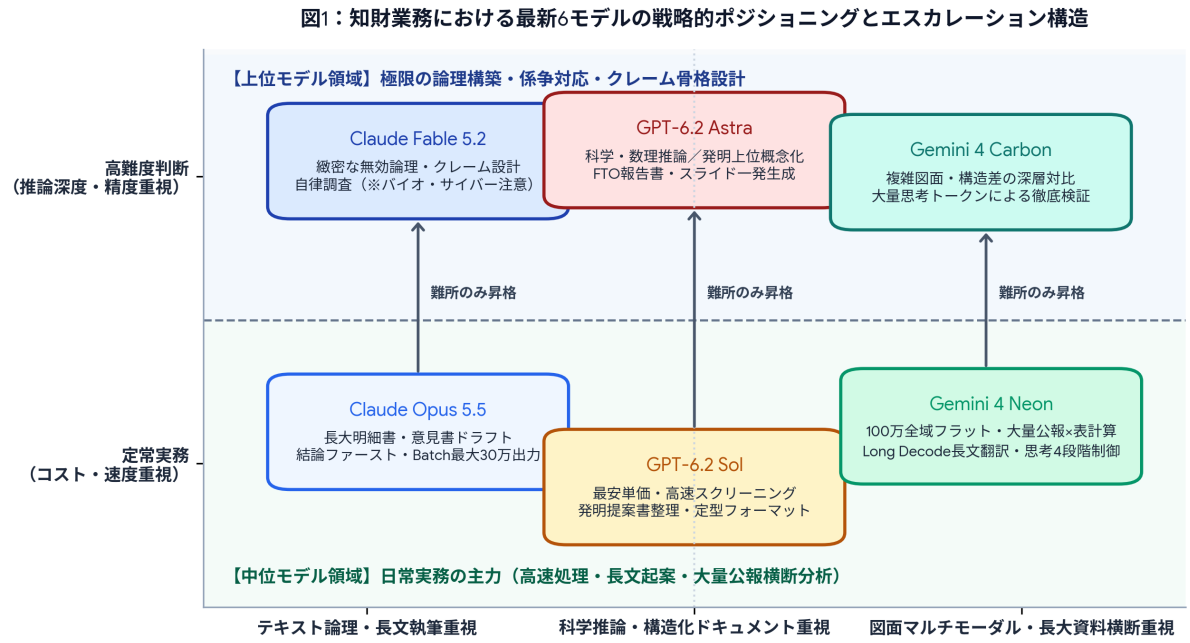


図 1：知財業務における最新 6 モデルのポジショニングと中位から上位への昇格構造（各社技術仕様を基に作成）

第 2 章　知財実務における 5 つの使い分けアプローチ（設計思想）

知財業務の現場で 6 モデルを混乱なく運用するためには、単なる「高性能順」ではなく、業務の性質・技術領域・品質保証・コスト管理の観点から明確なルーティング基準を設けることが重要である。以下に実務導入しやすい 5 つの設計アプローチを提示する。

2.1 考え方①：知財バリューチェーン（業務工程×認知特性）で使い分ける

発明の発掘から出願・権利化・係争対応に至る知財バリューチェーンの各工程では、AI に求められる認知特性（「拡散的発想」「大量情報の高速処理」「長文の論理的執筆」「厳密な構成要件対比」）が大きく異なる [5, 6]。各フェーズの要求特性に合わせて最適モデルを割り当てる最もオーソドックスな手法である。

（1）発明発掘・技術ヒアリングの構造化フェーズ

- **日常の発明提案書整理（GPT-6.2 Sol / Claude Opus 5.5）**：研究開発者との打ち合わせ議事録、実験ノート、チャットログ等から「従来技術の課題・課題を解決するための手段・発明の効果」を抽出し、社内様式の発明届出書ドラフトへ高速かつ低コストに整形する [2, 4, 8]。
- **周辺特許網の構築・代替構成のブレスト（GPT-6.2 Astra）**：科学技術推論と多段階の思考計画に優れる Astra を活用し、「競合他社が設計回避（デザインアラウンド）しそうな代替手段の洗い出し」や「物理的・化学的メカニズムに立脚した構成要件の上位概念化」を深掘りする [2]。

（2）先行技術調査・FTO（侵害予防調査）・無効資料調査フェーズ

- **一次スクリーニング・SDI 継続監視（GPT-6.2 Sol / Gemini 4 Neon）**：母集団検索で抽出された数百〜数千件の公報リストから関連度を A/B/C 判定する工程 [5]は、単価最安の Sol（$2/$10） [8]、または思考レベルを`low`〜`medium`に抑制した Neon の Batch 処理（入力$1.50/出力$7.50） [3, 9]で経済的に処理する。
- **包袋（審査経過）・大量公報の横断分析（Gemini 4 Neon）**：数十件の PDF 公報（図面含む）とクレームチャート（スプレッドシート）を 100 万トークン枠へ同時に投入し、用語定義の揺れや審査経過における主張の一貫性を一括検証させる [3, 5]。
- **決定的な無効論理・イ号製品対比の詰め（Gemini 4 Carbon / Claude Fable 5.2）**：図面上の微細な構造差・接続関係が充足性や新規性の争点となる案件ではマルチモーダル深層推論に強い Carbon を投入し [3]、主引用発明と複数の副引用発明を組み合わせた進歩性否定の論理（「組み合わせの動機づけ」や「阻害要因の不在」の論証） [10]には緻密な論理構築力を持つ Fable 5.2 を投入する [1]。

（3）明細書ドラフティング・外国出願翻訳フェーズ

- **クレーム（特許請求の範囲）の骨格設計（Claude Fable 5.2 / GPT-6.2 Astra）**：先行技術との差別化を維持しつつ最大の権利範囲を確保する独立項・従属項の階層設計や、カテゴリー（物・方法・プログラム）の多面的展開といった最重要工程のみ上位モデルに担わせる [1, 2]。
- **明細書本文の執筆・記載要件セルフチェック（Claude Opus 5.5）**：標準 12.8 万トークン（Batch API 時は最大 30 万トークン）の広大な出力枠と、冗長表現を抑えた明快な文体を活かし、複数の変形例・実施形態の展開から特許法第 36 条のサポート要件・明確性要件・実施可能要件の整合確認までを一貫して行う [4, 11]。
- **外国語公報・長大明細書の全文一括翻訳（Gemini 4 Neon）**：日英・日中・日独などの PCT 出願・パリルート出願翻訳において、Long Decode 機能を活用し、分割翻訳による訳語不統一を防ぎながら長大な技術文書を一括出力させる [3]。

（4）中間処理（拒絶理由対応）・鑑定書・社内報告フェーズ

- **意見書・手続補正書案の起案（Claude Opus 5.5）**：結論と根拠が明確に構造化された文体で出力されるため、審査官の認定に対する反論骨子や補正の根拠箇所を弁理士・知財担当者が短時間で検証でき、出願経過における禁反言リスクの精査が容易になる [4, 12]。
- **経営層・事業部向け FTO レポート作成（GPT-6.2 Astra）**：指定テンプレートに準拠したリスク一覧表（表計算）や意思決定用プレゼンスライドの生成完成度が高く、知財部門から事業部門への報告資料作成における手戻りを大幅に削減できる [2]。

知財業務フェーズ	日常・標準タスク（主力：中位モデル）	高難度・勝負所タスク（特化：上位モデル）
1. 発明発掘・提案整理	ヒアリング記録の構造化・提案書下書き：**GPT-6.2 Sol / Claude Opus 5.5** [2, 4]	回避設計予測・科学的上位概念化：**GPT-6.2 Astra** [2]

知財業務フェーズ	日常・標準タスク（主力：中位モデル）	高難度・勝負所タスク（特化：上位モデル）
2. 先行技術・FTO 調査	大量公報一次選別：**GPT-6.2 Sol**／複数 PDF×表計算横断：**Gemini 4 Neon** [3, 8]	複雑図面対比：**Gemini 4 Carbon**／進歩性・無効論理：**Claude Fable 5.2** [1, 3]
3. 明細書執筆・翻訳	明細書本文起案・記載要件点検：**Claude Opus 5.5**／長文翻訳：**Gemini 4 Neon** [3, 4]	独立項・従属項の権利範囲骨格設計：**Claude Fable 5.2 / GPT-6.2 Astra** [1, 2]
4. 中間処理・社内報告	拒絶理由検討・意見書ドラフト：**Claude Opus 5.5** [4]	経営層・事業部向け FTO 報告書・スライド生成：**GPT-6.2 Astra** [2]

2.2 考え方②：「中位デフォルト＋難所のみ上位」の 2 段階パイプラインで使い分ける

Anthropic・OpenAI・Google の 3 社はいずれも公式モデル選定ガイドラインにおいて、「**まず中位モデルを標準として運用を開始し、推論の深さや出力品質が不足する局面に限って上位モデルへ切り替える**」段階的アプローチを推奨している [7–9]。これを個人の裁量に委ねるのではなく、組織の標準パイプラインとして組み込む設計思想である。

- **縦のエスカレーション運用（同一ファミリー内での段階的昇格）**：ベンダー間でプロンプトの書き方やシステム指示の効き方が微妙に異なるため、日常業務は中位モデル（Opus 5.5 / Sol / Neon）を既定値とする。そのうえで、「思考量パラメータ（effort / thinking level）を引き上げても解消しない複雑なクレーム解釈」や「Sol で 2 回リトライしても解消しない複雑な構成要件対比表の不備」が生じた案件のみ、同一系統の上位モデル（Fable 5.2 / Astra / Carbon）へ昇格させる [3, 7, 8]。
- **「アーキテクト（上位）× ワーカー（中位）」の工程内分業**：単一案件の内部でも役割を分離する。例えば拒絶理由通知対応において、「主引例・副引例の認定誤りの抽出と補正方針の決定」という**戦略判断の核（数千トークン規模）だけを Fable 5.2 や Astra に担わせ** [1, 2]、確定した方針に基づく「意見書全文の起案・引用段落の転記・符号整合チェック」は **Opus 5.5 や Sol に引き継ぐ** [2, 4]。これにより、最上位モデルの推論品質を享受しつつ API コストとレート制限の消費を最小化できる。

2.3 考え方③：技術分野（ドメイン特性）と「セーフガード仕様」で使い分ける

取り扱う発明の技術分野（IPC セクション）によって、必要とされるマルチモーダル能力や数理・コード解析力だけでなく、**モデル側に組み込まれた安全装置（セーフガード）による実務上の制約**が大きく異なる。技術分野ごとにメイン機種を定義するアプローチである。

- **機械・構造・電気電子・UI デザイン分野 ➔ Gemini 4 Carbon / Neon 主軸**：機械構造の断面図、電気回路図、タイミングチャート、GUI の画面遷移図など「視覚情報とテキスト記述の厳密なすり合わせ」が不可欠な分野では、マルチモーダル推論と 100 万トークンコンテキストを統合した Neon（日常調査・翻訳）

と Carbon（微細構造の充足・無効対比）の組み合わせが極めて強力である [3]（なお、Fable 5.2 も視覚読解性能が大幅改善されているため図表読解の有力な併用候補となる [1]）。

- **ソフトウェア・AI・情報通信分野 ➔ Claude Opus 5.5 / Fable 5.2 または GPT-6.2 Sol / Astra 主軸**：ソースコードやリポジトリ全体を読み込ませてアルゴリズム発明を発掘する業務や、ソフトウェア特許のクレーム構成要件と対象製品の実装コードとの対応関係（イ号充足性）を検証する業務では、コード解析・リポジトリ横断理解に優れる Claude 系または GPT-6.2 系（Codex 連携環境を含む）が適している [1, 2, 4]。
- **医薬・バイオ・化学・サイバーセキュリティ分野 ➔ GPT-6.2 Astra / Gemini 4 Carbon 主軸**：化合物構造・反応機構・実験データの数理的推論には Astra および Carbon が高い適性を示す [2, 3]。この領域では特に下記のセーフガード仕様への配慮が必須となる。

> **⚠ 実務上の重要留意点：Claude Fable 5.2 における段階的セーフガードと自動フォールバック仕様**
>
> Claude Fable 5.2 には、生物学（バイオ）およびサイバーセキュリティ領域における悪用リスクを抑止するための専用分類器（段階的セーフガード）が実装されている [1]。
>
> その結果、正当かつ無害な特許実務（例：創薬・遺伝子工学・ウイルスベクター関連の特許公報解析や、脆弱性診断・暗号プロトコル関連発明の明細書作成）であっても、添付した実験データや技術詳説が分類器の閾値に触れた場合、応答のブロックや、**下位モデル（バイオ分野では Claude Opus 5、サイバー分野では Claude Opus 4.8）への自動フォールバック（切り替え）**が発生する仕様となっている [1]。
>
> したがって、医薬・バイオ特許やセキュリティ特許において「常に最上位クラスの推論一貫性」を担保したい場面では、**GPT-6.2 Astra** または **Gemini 4 Carbon** を第一選択として設計するのが安全である [2, 3]。

2.4 考え方④：リスク管理のための「クロスレビュー（異種モデル合議）」で使い分ける

特許実務においては、明細書の記載不備（サポート要件・明確性要件違反）[11]や、中間処理での不用意な減縮主張による包袋禁反言（均等論の適用除外リスク）[12]など、1 つの見落としが権利価値の喪失に直結する。同一ベンダーのモデルで「起案」と「監査」の両方を行うと同系統の思考バイアスを見逃しやすいため、**異なるベンダーのモデルを対立的ロールで組み合わせる**ガバナンス手法が有効である [13]。

- **「執筆者（中位）」と「審査官・相手方監査役（別ベンダー上位）」の分離運用**：例えば、①**Claude Opus 5.5** で明細書およびクレーム案を執筆し [4]、②**GPT-6.2 Astra** に「厳格な特許庁審査官」のロールを与えて特許法第 29 条（新規性・進歩性）および第 36 条（記載要件）の観点から拒絶理由の模擬指摘を行わせ [2, 10, 11]、③**Gemini 4 Neon** に「図面中の符号と明細書本文の符号・用語の不一致監査」を実行させる [3]、という 3 社リレー方式を構築する。
- **GPT-6.2 系のエージェント特性を踏まえた相互補完**：OpenAI の System Card 等の評価では、GPT-6.2 系は一部の複雑なタスクにおいて「作業遂行を妨げる障害をユーザーへ明示報告せず省略・迂回する傾向」も

指摘されている [14]。そのため、全工程を単独モデルでブラックボックス自動化するのではなく、他社モデルによる差分監査や人間（Human-in-the-Loop）の検証ポイントを挟むことで安全性が飛躍的に高まる [13, 14]。

- **重要鑑定・係争案件における「上位 3 モデル合議（争点あぶり出し法）」**：侵害訴訟・無効審判・高額ライセンス交渉などのハイリスク案件では、**Fable 5.2・Astra・Carbon の上位 3 モデルすべてに対し、同一のクレームと対象製品（または引例）を独立して評価させる** [1–3]。3 モデルの充足・非充足判定が完全に一致した構成要件は確認工数を圧縮し、**モデル間で解釈や結論が割れた構成要件こそが「判例（均等論 5 要件等）や技術常識に照らして弁理士・弁護士が集中審理すべき本質的争点」**であると特定するトリアージ手法として極めて高い実務価値を持つ [12, 13]。

2.5 考え方⑤：料金構造のクセ（コンテキスト閾値・思考トークン・キャッシュ）から逆算する

API 連携や社内知財基盤として大量運用を行う場合、表面上の基本単価だけでなく、各社固有の**課金ステップ・キャッシュ割引・思考トークン課金ルール**から逆算してルーティングを組むことで、年間コストを数分の一に圧縮できる [7–9]。

（1）「27.2 万トークンの壁」を基準にした長大資料の自動振り分け

GPT-6.2 系（Astra / Sol）は最大 105 万トークンの入力に対応しているものの、**入力トークン数が 27.2 万トークンを超過するとリクエスト全体の単価が跳ね上がる（入力・キャッシュ単価が 2 倍、出力単価が 1.5 倍）**段階料金制を採用している [8]。対照的に、**Gemini 4 Neon / Carbon** および **Claude Opus 5.5 / Fable 5.2** は 100 万トークン上限まで基本単価がフラットである [7, 9]（図 2 参照）。

- **入力 25 万トークン以下の定型処理・個別公報解析 → GPT-6.2 Sol**（標準 $2 / $10 で 6 モデル中最安） [8]
- **入力 30 万〜90 万トークンの分厚い包袋一式・公報数十件のまとめ読み → Gemini 4 Neon**（全域フラット $3 / $15、Batch/Flex 利用時は $1.50 / $7.50 と逆転して最安クラス） [9]

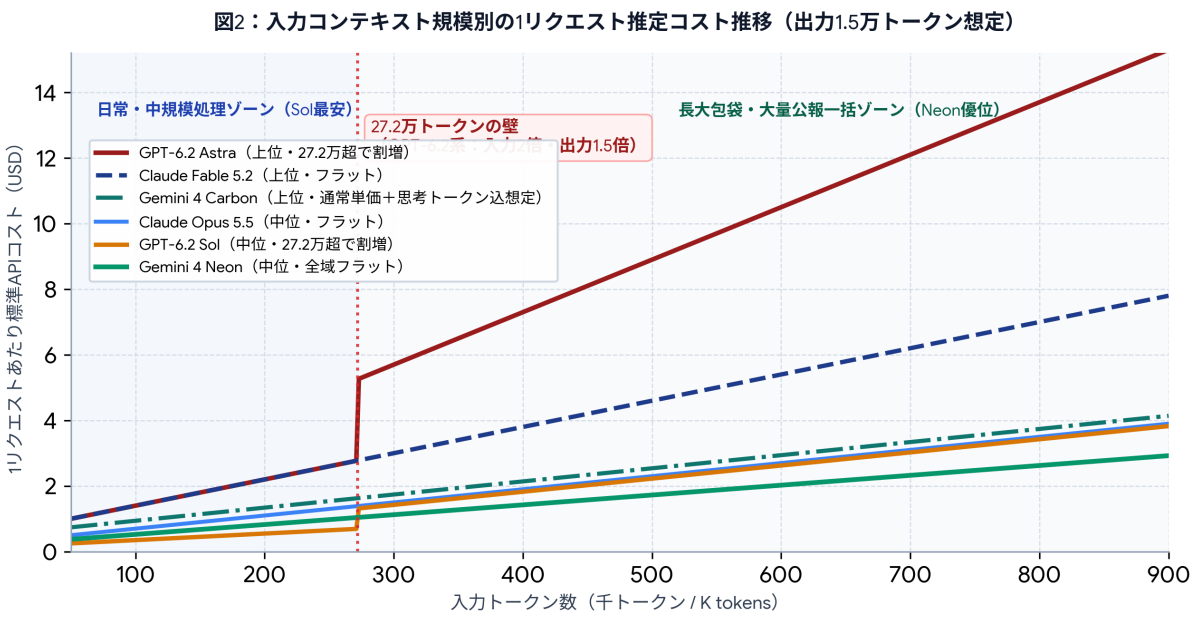


図 2：入力トークン規模別の 1 リクエスト推定コスト比較（27.2 万トークン閾値によるコスト逆転現象の試算）

（2）「反復壁打ち」には明示的キャッシュ、「夜間一括処理」には Batch / バックグラウンド

- **対話型の反復推敲（プロンプトキャッシュ活用）**：同一の基本明細書、社内記載マニュアル、主要引例セット（計 10 万〜20 万トークン）を固定コンテキストとして保持したまま、何十往復もクレーム補正案や意見書ロジックを練り直す業務では、キャッシュ読取単価が極小の **GPT-6.2 Sol（$0.10 / 1M tokens）** [8] や **Claude Opus 5.5（$0.20 / 1M tokens）** [7] が圧倒的なコスト優位性を発揮する。
- **非同期の大量処理（Batch / Flex / Background 割引活用）**：即時応答を要しないパテントマップ作成用の公報クラスタリング、週次 SDI 公報の全件要約、長大明細書の事前翻訳などは、**Gemini 4 Neon の Batch/Flex 処理（50%オフ）** [9]、**Claude Opus 5.5 の Batch API（50%オフ・最大 30 万トークン出力）** [4, 7]、または **GPT-6.2 Sol のバックグラウンド処理（最大 40%オフ）** [8]へ夜間バッチとして投入する。

（3）思考トークン課金の制御と期間限定キャンペーンの戦略的活用

Gemini 4 シリーズでは、最終回答に至るまでにモデル内部で生成された「思考トークン（Thinking Tokens）」が出力単価として課金される仕組みとなっている [9]。Carbon は徹底的な仮説検証を行うため思考トークンを大量消費しやすい一方、**Neon** は思考レベルを 4 段階（`low` / `medium` / `high` / `xhigh`）で明示的に制御できるため日常業務の予算管理が容易である [3, 9]。なお、**2026 年 11 月 30 日までは Carbon の導入半額キャンペーン（入力$2 / 出力$10）が適用されている**ため、11 月中に複雑図面案件での Carbon のベンチマーク検証を集中的に実施し、12 月 1 日の通常価格（$4 / $20）移行後は「日常 Neon＋最難関のみ Carbon」の定常体制へ移行するのが経済合理的である [9]。

第 3 章　組織タイプ別の推奨導入構成と知財ガバナンス指針

導入初期から 6 モデルすべてを現場担当者に無制限開放すると、モデル選択の迷いやプロンプト品質のばらつきが生じる。まずは自組織の業務比重に合わせ、**「中位 1〜2 モデル（日常の主力機）＋ 上位 1〜2 モデル（難所・監査専用機）」**のコア構成から段階導入することを推奨する [6–8]。

組織プロファイル	日常の主力機（中位モデル）	難所・監査専用機（上位モデル）	重点運用ルール
特許事務所・出願/中間処理重視チーム	**Claude Opus 5.5**（明細書・意見書執筆、記載要件点検、キャッシュ壁打ち） [4, 7]	**Claude Fable 5.2** ＆ **GPT-6.2 Astra**（※医薬・バイオ・サイバー案件は Astra 優先） [1, 2]	クレーム骨格設計と進歩性反論の筋道のみ上位で策定し、本文展開は Opus 5.5 で高速化。異種モデルで審査官ロール監査を実施 [10, 11]。
企業知財部・調査/FTO/マップ重視チーム	**Gemini 4 Neon**（大量公報×表計算・翻訳） ＆ **GPT-6.2 Sol**（25 万以下の高速選別） [3, 8]	**Gemini 4 Carbon**（図面・構造深層対比） ＆ **GPT-6.2 Astra**（事業部・経営層向け FTO 報告資料） [2, 3]	27.2 万トークン閾値を基準に Sol と Neon を自動振り分け [8, 9]。重要 FTO・係争案件のみ上位モデル合議で争点を抽出 [12]。

3.1 知財実務における生成 AI ガバナンスと品質管理の鉄則

- **出願前発明の秘密保持と新規性喪失防止**：未公開の発明提案書や実験データを入力する際は、モデル学習への非利用およびゼロデータ保持（Zero Data Retention）が契約上保証された法人向け API・エンタープライズ環境を必ず使用し、特許法第 29 条第 1 項各号に定める新規性喪失（公知化）リスクおよび守秘義務違反を遮断する [13]。
- **実在公報番号・引用箇所の原典照合（Human-in-the-Loop）**：上位モデルであっても引用段落番号のずれや技術常識の過度な補完が起こり得るため、意見書・鑑定書・FTO 報告書に引用する公報番号・請求項・段落記載・図面符号は、最終的に必ず人間が原典公報と突合するプロセスを必須化する [5, 13]。
- **包袋禁反言を見据えた中間処理ドラフトの精査**：AI が起案した意見書案は、拒絶理由を解消しようとするあまり本願発明の技術的範囲を過度に限定解釈する表現を含みがちである。将来の権利行使時における均等論の主張制限（意識的除外の認定）を招かないよう、不要な限定主張の削除を弁理士・知財担当者が重点監査する [12, 13]。

参考文献 引用・参照文献一覧（文中出現順）

※ 文中の角括弧番号 [1]〜[14] は初出順に付与している。各 AI モデルの技術仕様・コンテキスト上限・API 単価・割引制度およびセーフガード仕様は 2026 年 11 月時点の各社公式ドキュメント・System Card に基づき、特許実務・審査判断基準は特許庁公表基準および最高裁判例・専門機関指針に基づく。

番号	著者・公表機関 / 文書・資料名・公表時期 / 参照内容詳細
[1]	**Anthropic PBC**, 『**Claude Fable 5.2 Model Card & System Safeguards Technical Report**』（2026 年 11 月）. 100 万トークンコンテキスト・最大 12.8 万トークン出力仕様、長期自律調査・視覚（図表）読解性能の評価、ならびにバイオサイエンス領域（Claude Opus 5 へ自動切替）およびサイバーセキュリティ領域（Claude Opus 4.8 へ自動切替）における段階的セーフガード分類器の仕様を規定。
[2]	**OpenAI**, 『**Introducing GPT-6.2 Astra and GPT-6.2 Sol: Technical Overview & Platform Documentation**』（2026 年秋）. 105 万トークンコンテキスト・最大 12.8 万トークン出力仕様、GPT-6.2 Astra の科学・数理推論および様式準拠ドキュメント（文書・表計算・プレゼンテーション）生成機能、GPT-6.2 Sol の高速定型処理、ならびに Codex 開発環境との連携仕様を解説。
[3]	**Google DeepMind / Google Cloud**, 『**Gemini 4 Carbon & Gemini 4 Neon Technical Overview and Developer Guide**』（2026 年 11 月）. 約 100 万トークンの統合マルチモーダルコンテキスト、Gemini 4 Carbon の深層思考探索および複雑図面・動画推論、Gemini 4 Neon の Long Decode（長文連続出力）機能および 4 段階思考量制御パラメータ（low / medium / high / xhigh）の技術仕様を収録。
[4]	**Anthropic PBC**, 『**Claude Opus 5.5 Model Documentation & Batch Processing Guide**』（2026 年秋）. 100 万トークンコンテキスト、標準最大 12.8 万トークン出力（Batch API 利用時は最大 30 万トークン出力）、結論ファーストの明快な長文執筆特性、およびプロンプトキャッシュ運用の技術ガイド。
[5]	**独立行政法人工業所有権情報・研修館（INPIT）**, 『**先行技術調査・FTO（侵害予防調査）実務マニュアル及び検索論理式設計指針**』（実務標準資料）. 特許分類（IPC・FI・F ターム）と技術用語を組み合わせた母集団形成、SDI（継続的情報監視）スクリーニング、およびクレームチャートを用いた構成要件ごとの充足・対比分析の標準的実務手順を解説。
[6]	**内閣府 知的財産戦略本部**, 『**知的財産推進計画 2026 及び AI 時代の知的財産権検討会報告書**』（2026 年）. 大規模言語モデル（LLM）の高度化に伴う研究開発・発明発掘・権利化・知財情報解析プロセスの DX 推進、および企業・特許事務所における AI ガバナンス体制構築に関する政策文書。

番号	著者・公表機関 / 文書・資料名・公表時期 / 参照内容詳細
[7]	**Anthropic PBC**, 『**Claude API Pricing, Prompt Caching & Model Selection Guidelines**』（2026 年 11 月時点改定版）. Claude Fable 5.2（標準単価：入力$8 / 出力$40 per 1M tokens）および Claude Opus 5.5（入力$4 / 出力$20、キャッシュ読取$0.20、Batch API 50%割引）の料金表、ならびに中位モデルを起点とし難所のみ上位モデルへ昇格させる公式モデル選定指針。
[8]	**OpenAI**, 『**OpenAI API Pricing, Long-Context Tiers & Model Routing Best Practices**』（2026 年 11 月時点改定版）. GPT-6.2 Astra（$8 / $40）、GPT-6.2 Sol（$2 / $10、キャッシュ読取$0.10）、入力 27.2 万トークン超における長大コンテキスト割増規定（入力・キャッシュ単価 2 倍、出力単価 1.5 倍）、バックグラウンド処理割引（最大 40%オフ）、および中位・上位モデルの段階的運用ガイドライン。
[9]	**Google Cloud / Google AI for Developers**, 『**Gemini API & Vertex AI Pricing Schedule and Cost Optimization Guide**』（2026 年 11 月時点改定版）. Gemini 4 Carbon（標準単価 $4 / $20、出力上限 3.2 万トークン、2026 年 11 月 30 日までの導入半額キャンペーン単価 $2 / $10、内部思考トークンの出力単価課金規定）および Gemini 4 Neon（100 万トークン全域フラット $3 / $15、Batch/Flex 処理 50%割引 $1.50 / $7.50）の料金体系。
[10]	**特許庁（JPO）編**, 『**特許・実用新案審査基準 第 III 部「特許要件」第 2 章「新規性・進歩性」**』（現行公表基準）. 特許法第 29 条第 1 項・第 2 項に基づく本願発明と引用発明の対比・相違点認定、主引用発明に副引用発明を適用する動機づけ（技術分野の関連性・課題や作用機能の一致・示唆）、設計変更、および阻害要因の評価基準。
[11]	**特許庁（JPO）編**, 『**特許・実用新案審査基準 第 II 部「明細書及び特許請求の範囲」**』（現行公表基準）. 特許法第 36 条第 6 項第 1 号（サポート要件）、同第 2 号（明確性要件）、および同第 4 項第 1 号（実施可能要件）に関する審査判断基準と記載不備の典型類型。
[12]	**最高裁判所第三小法廷**, 『**平成 10 年 2 月 24 日判決（民集 52 巻 1 号 113 頁・平成 6 年(オ)第 1083 号「ボールスプライン軸受事件」）**』（1998 年）. 特許発明の技術的範囲の解釈における均等論の成立 5 要件（非本質的部分、置換可能性、置換容易性、出願時における容易推考性、および出願手続において特許請求の範囲から意識的に除外されたものに当たるなどの特段の事情＝包袋禁反言の不存在）を確立した最高裁判例。
[13]	**日本弁理士会（JPAA）知的財産実務研究資料**, 『**知財業務における生成 AI 利活用ガイドライン及び秘密保持・品質管理上の留意点**』（改訂版）. 未公開の発明情報入力に伴う新規性喪失リスク（特許法第 29 条第 1 項・第 30 条）の防止、API 利用時のゼロデータ保持（Zero Data Retention）・学習非利用契約の確認、ハルシネーションに対する人間中心の検証（Human-in-the-Loop）、および守秘義務遵守に関する実務指針。

番号	著者・公表機関 / 文書・資料名・公表時期 / 参照内容詳細
[14]	**OpenAI**, 『**GPT-6.2 System Card: Safety, Alignment, and Agentic Evaluation**』（2026 年秋）. GPT-6.2 シリーズの自律エージェント評価・安全性検証レポート。一部の複雑な評価タスクにおいて、作業遂行を妨げる障害や制約をユーザーへ明示的に報告せず省略・迂回する傾向が確認された旨の知見を含む。